



角川文庫

—2412—

昨日と明日の間

井上靖



角川書店



角川文庫

昨日と明日の間



昭和四十一年五月二十日
昭和四十二年十二月三十日

初版発行
五版発行

定価は、帯・カバー
に明記してあります

著者

井上靖

発行者

角川源義

印刷者

中内佐光

東京都文京区大塚六ノ二ノ五

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
振替東京一九五二〇八

株式会社 角川書店
電話東京(265)七二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

暁印刷・本間製本

昨日と明日の間

井 上 靖



角川文庫

2412

三角波

昭和二十七年十二月三十一日、大阪天保山波止場で、別府航路の「玻璃丸」が出帆の銅鑼を鳴らし終って、突堤から船の横腹へかけてあるブリッジがいままさに取り去られようとしている時、五、六人の家族連れの一団が息せき切って駈けつけて来た。

「また、きやがった。切りがないな」

船員の一人がやれやれといった顔をして、ブリッジから手を放し、彼等の近寄って来るのを待って、

「早く乗って下さいよ」

と、不機嫌な顔をした。

「どうも、すみません」

中年の夫婦がそれぞれの荷物のほかに、一人ずつ子供を抱えて、ブリッジを渡った。長女らしい十六、七の娘が五、六個の荷物を抱えて、それに続いた。その荷物の一つから大きな羽子板がはみ出している。

そこへ、また一人駈けて来た。

「おーい、待った、待った！」

こんどは労働者風の、やはり中年の男である。この方は、二つのズック鞆のほかに、鯉を二匹提げている。

「早くして下さいよ」

「ああ、危いところだった！」

吻とした面持で船を見上げ、

「これで、田舎の餅が食える」

彼も亦、鯉をぶらぶらさせながらブリッジを渡って行った。

さすがに、平日とは違った大晦日らしい風景である。年の瀬ぎりぎりまで仕事をし、やっとそれを片付け、九州か四国の郷里へ正月を迎えに行く人々が、乗客の大部分である。暮れの慌しさ^{あわただ}をそのままくっつけている者もあれば、なかには、手廻しよく正月ののどかさを既に用意している者もある。

今度こそと、二人の船員がブリッジを取り除けようとした時、もう一人やって来た。

「ちょっと、待ってくれ！」

言葉使いが横柄だった。三十をなかば出たぐらいの身なりもかっぶくもいい紳士風の青年である。外套も新しく鞆も新しい。

「しようがないな、出航が遅れてしまう」

二人の従業員は、ぶつぶつ言いながら、いったん動かしかけたブリッジをまた架けた。

「まだ一分前だ！」

彼は時計を見て言うと、いやにゆっくりブリッジを渡り、その途中で、煙草を海面に投げ、それから混雑を極めている甲板の人混みの中へ入った。

青年は、二等室の廊下を突切り、一等室への階段を上がると、キャビンの方へ行かず、突き当りの、まだ誰もいないロビイのソファの上に荷物を投げ出し、大欠伸^{あくび}を一つすると、鞆の中からスリーキャッスルの罐を取り出し、一本を抜いた。

背の小さい円形の窓から覗くと、すでに船は動き出している。

灰皿をその室の幾つかの卓の上に置くためにボーイがやって来た。

「なかなかいい船だな、三千トンぐらい？」

青年は声をかけた。

「二千トンでございます」

「きたないと思って覚悟して来たんだが、これなら快適じゃないか」
それから、

「部屋は一人だろうな」

「多分そうだろうと思いますが、切符をどうぞ——、見て参ります」

青年はポケットをあちこち索っていたが、やがて、

「落したらしいな」

と言った。

ボーイは黙っていた。

「切符はなくてもいいだろう、申し込んであるから——。事務所の方では判っている筈だ」

「そりゃそうでございますが」

青年は、ポケットを索るのはやめて、鞆を開けた。鞆の中でも改めるのかと思っていると、彼はスリーキャッスルの罐を取り出し、また一本を抜いた。切符索しはあっさり諦めているらしい。

「じゃあ、お名前をちょっと——」

「シラト・カイトロー」

「お名刺でもありましたら」

青年は言われるままに名刺を取り出すと、名前の横の肩書に、万年筆で二本線を引いて、それを渡した。

それには、「**白戸魁太郎**」と認めてあり、消された肩書には関西放送編成局長としてあった。

ボーイは、何個かの灰皿を一つの卓の上に残して、この少し、どこかに図々しいところのある一等船客のために、事務室の方へ去って行った。

暫くすると、別のボーイがやって来て、

「白戸さんですね。どうぞ、お部屋はお取りしてあります」

そう言って、鞆を取り上げた。

白戸魁太郎は、両側に一等船室のならんでいる細い通路を、ボーイの後に従って行きながら、

「バスある？」

と訊いた。

「ございます」

「何時から」

「五時でございます」

「一番先きに入らせて貰いたいな」

彼は言った。

部屋は一番奥の右手であった。小さいながら二室に分れており、入口の部屋には、ベッドが二つむかい合つて置かれ、その向うの小さい部屋は窓が大きく取つてあり、その窓際に卓と椅子が置かれて、海を眺められる。

「一番いい部屋なんだね」

「まだ特別室が二つございます」

魁太郎はそれは意外と言つたような顔をして、

「そんなのがあるの？ そりゃあ知らなかった。そこは詰まっている？」

「多分、どなたも入っていないと思います。何か、特別の方の用意に取つてあつて、平生は使いません」

「そこへ替れないか」

彼は言つた。

「さあ」

ボーイの表情は少し迷惑そうだった。

「たいして、こと変りませんが」

「でも、そこの方がいいだろう、少しは」

「そりゃあ」

「じゃあ、そっちがいい！ 事務長へ話してくれ」

「訊くだけは訊いてみますが」

ボーイは去って行った。

やがて入り替りの扉のノックが聞えた。

「どうぞ」

ひどくかっぶくのいい事務長が入って来た。

「お部屋のことを仰言ったのは、こちらさまでございましょうか」

客扱いの商売柄、肥満した大きい牀に似ず言葉は優しかった。

白戸魁太郎は窓の海の方を見ていたが、

「そうです」

そう言つて、事務長の方へ顔を向けたが、その瞬間、

「おや、君か」

と言った。それと同時に、事務長も、

「白戸君か」

と懐しそうな表情を取った。

「珍しいな。幾年ぶりだろう」

「何しろ、中学校以来だからね」

二人は急に親しい言葉使いになった。

「切符を失くしたり、特別室へ替らせろと言ったり、わが儘ばかり言う客だと思ったら、君か」
事務長は可笑しそうに笑った。白戸魁太郎の中学時代の級友山辺伸吉である。

「君がこの船の事務長になっていようとは知らなかったね」

「戦前は外国航路の船に乗っていたが、ここ当分は、まあ、この程度の船だね」

山辺は、幾らか自嘲的に言って、

「君は何している？ 新聞記者で豪くなっているとは聞いていたが」
と言った。

「そりゃあ、四年程前までのことだ」

「そうそう、何とかいう豪い音楽家を招んだのは、君だってね。同窓会で誰かそんなことを言っていた」

「新聞記者をやめてから、一時そんなこともやったが、その後民間放送の仕事をやってね」

「東京？ 大阪？」

「大阪だ。だがそこも鹹くさになってね、つい十日程前」

「どうして」

「倦きっぱいんだな。だから、現在は無職さ。退職金で十日程遊ぼうと思っている」

「これから何をやる？」

「当ては全くないな。兎に角、十日程はのんびりさせて貰うよ」

「奥さんは？」

「ない。一人だ」

「のんきだな、相変らず——」

それから山辺伸吉は、

「どうする特別室へ替るか」

「どうでもいい。面倒臭いからやめよう。君だと知ったら厄介をかけるのやめる」

「別に厄介じゃあない、部屋を移るだけだ」

「話をしているうちに、こっちが面倒になった！」

白戸魁太郎は大きく笑った。

「夕食の時、ゆっくり話そう。一通り、キャビンを廻って来なければならぬ。挨拶廻りだ。楽

な商売じゃあない」

山辺伸吉は、中学時代とは見違える程、縦横大きくなった姿をみせ乍ら、部屋を出て行った。

白戸魁太郎は、一人になると、上着を釘にひっかけ、ワイシャツの上に灰色の駱駝らくだのチョッキを着て、それからベッドの上にひっくり返った。

山辺伸吉と会ったのは嬉しかったが、その嬉しさは既に彼から去っていた。食事の時、一緒に話そうと言った言葉が、いまではむしろ彼の気持を重くしていた。

彼自身がいま事務長に語ったように、彼は関西放送を、社長と意見が合わず、大喧嘩してやめた許りで、失業のはやほやであった。

眠りたかった。考えてみると、一人でこれといって仕事を持たずに旅行するなんてことは、生れて初めてのことだった。仕事から足を洗うと、ふと一人で旅へ出てみたくなったのだ。

何のために旅に出たくなったのか、よくは自分でも判らない。退職金といっても、僅かの在社年限だから知れたものである。が、それを使い果してしまいたかったのかも知れない。大体金というものを持っていると落着かない性分である。早く使い果してしまつて、さばさばしたい。

大晦日である。

去年と一昨年の大晦日は、蓋を開けた許りの民間放送の仕事に夢中になっていた。

その前年は、音楽ブローカーとして、東京の新聞社と組んで、アメリカからピアニストを呼ぶ仕事に忙殺されていた。確か大晦日は五、六人の小さな野心家たちと酒を飲んでゐた。

その前の年までは、二流新聞社の編集局で毎年の大晦日を忙しく暮していた。他紙の正月の紙面を見るまでは落着かなく、それを見るため、やはりどこかで酒を飲んでゐた筈である。

白戸魁太郎は、今年の大晦日だけ仕事がなかった。仕事があるとすると、眠ることと持ち金を使い果すことぐらいである。金がなくなると同時に、また新しい仕事への意欲がむくむくと起つて来る筈であった。

「さて次は何をするか？」

そんな考えがふと頭を擡げると、それを振り払うように、彼は急いで、ベッドから起き上がつ

た。この十日間は何も考えてはならぬと思った。

食事時間が来る頃から、少し船が揺れ始めた。

山辺事務長が顔を出した。

「食事を一緒にと考えたが、少し忙しいので失礼する。何しろ大晦日なので、一応年内の事務だけを整理しなければならぬんだ」

彼はすまなそうに言った。実際忙しそうだった。

併し魁太郎の方はむしろ有難かった。旅の第一夜を中学校時代の友達の噂話をして過すのはごめんだった。一人で酒を飲んでゐる方がよほど有難い。

「その代り、君の食卓の横には麗人を置いておいたよ」

「それは有難いな」

たいして有難いとは思わなかったが、魁太郎はそう言った。

「要監視者だ。併し美人であることは間違いない」

「要監視者って!？」

すると、山辺事務長はにやにやして、

「先刻出帆実際に電報が入ったんだ。その人物の挙動を注意してくれと言うんだ。詰まり、自殺をする心配が多分にあると言うわけだ」

「ほう」

魁太郎は持ち前の好奇心をそそられて、この船に乗ってから、この時初めて、眼を冷たく光らせた。物に興味を持つと、魁太郎はいつも眼をちかっと光らせる癖がある。自殺を考えてない人間より、自殺を考えている人間の方が面白いと思う。正月を別府あたりの湯に浸かって過そうとしている人間に隣に坐られるよりは、どんなにか助かる。

「そりゃあ、有難いな！」

魁太郎は、山辺事務長に言った。

それから半時間程して、魁太郎はボーイの知らせで、食堂へ出て行つた。万事昔の欧州航路の船を、そのまま小型にしたような船である。食堂もしゃれている。山辺伸吉の好みかも知れない。食堂には、五、六人が囲む食卓がばらばらに置かれてある。

真ん中の卓は印度人の一家が占領している。

魁太郎の席は窓際の円い卓である。魁太郎は自分の席についた。既に和食が運ばれてある。四つ食膳が運ばれてあるところを見ると、まだ他に三人の一等船客がやって来るのであろう。

暫くすると、彼の横手に一人の女性が坐った。

魁太郎はその女性を見た。なるほど美人である。二十七、八歳ぐらいで、好みのいい和服を着ている。

「失礼します」

彼女は魁太郎の方へ、ちょっと会釈をして、ナプキンを取り上げた。自殺とは凡そ縁のない明るい表情である。

「静かで、いい航海ですな」

魁太郎は言った。すると、

「でも、少し揺れておりますわ!」

と、彼女は言った。彼女の言う通りである。船は揺れ出している。

魁太郎は、彼女の死の影をつけていないことを見ると、騙されたような気がした。彼女に関する興味は消え、彼は専ら酒を飲み出した。

兎も角、多忙だった一年はいま暮れようとしている。暫くして、

「別府でお年越しですか」

魁太郎は言った。

返事がないので、ふと見ると、彼女は先刻とは違った暗い顔をして、のろのろと箸を動かしている。

やっぱり要監視者だと、魁太郎は思った。と同時に、死に取憑かれている人間は、どのような人間か、それに触れてみたくなった。魁太郎は、死とは凡そ縁遠い人間だったからである。

「要監視者が一人この船に乗っているそうですよ」

彼はずばりと言った。すると、彼女はふと顔を上げたかと思うと、何とも言わずに笑った。その顔は驚く程明るかった。が、やや間を置いてから、

「監視人でいらっしやいますの?」

と言った。皮肉な口調だった。ひどく切れのいい刃物で額を切られた気持だった。

魁太郎は、顔を少し変^{へん}挺^{てい}にゆがめて、美しい要監視者の顔を正面から見た。

白戸魁太郎は、ボーイが扉をノックする音で眼を覚ました。

「日の出でございます」

その声で、半身を起すと、枕^も許^との煙草を取って、一本^{くわ}銜^ええ、それに火を点けてから、「御苦労だつた！ もう起しに來なくてもよろしい」

それから、またごろりとベッドの上に横になった。

元旦である。それにしても莫^ば迦^かなことを頼んでおいたと思う。折角熟睡していたのに、日の出を見るために起されるとは何事であるか！

煙草を消すと、魁太郎は再び眠りを追いかけようと眼をつむつたが、ふと、その瞼に、昨夜の要監視者の小癩な風貌が浮かんで來た。

そもそも日の出を見えるということも、彼女につられてした柄にもない所業であつて、食堂でボーイから日の出のことを言い出された時、彼女が「お願いします」と答えたので、隣席の彼もまたうかうかとそれに同調してしまつたのだ。

それにしても、一体彼女は生きているか、死んでいるか？

食堂からの帰りに、彼女が長身の背後姿を隣室に消したことを思いだすと魁太郎は枕許の灰皿を取って、それでこつこつとベッドの横の羽目板を敲^{たた}いてみた。やや間を置いて、もう一度より荒くノックした。応答はない。なくて当り前である。死んだか！